

## 芥川龍之介「杜子春」追考

越 智 良 一  
(国文学研究室)

### 序

芥川龍之介の童話「杜子春」(大正九年七月、『赤い鳥』)について、論者は、曾て以下のようなことを考えた。即ち、この物語は、贅沢で怠惰な青年杜子春が、安易な厭世主義から仙術修業を志すが、峨眉山の仙人鉄冠子は、そうした彼を戒める為に幻術の内に引き入れ、地獄の責苦にあい乍らも息子杜子春のことを思う母親の姿を見せて彼の人間信頼を回復させるといふものである。従つて、その主題は、「人間らしい正直な暮し」をしようとする杜子春の人間性開眼に求められるべきであつた。だが、そうした肯定的な人生觀の背後には、作者その人の根強い脱世間的傾向があり、作者は、自らの其れを鉄冠子の教えを通して否定し、自己規制しているようにも見える。其処には、現実の家庭環境や儒教的親子關係に苦しむ芥川自身の葛藤があつた訳で、生活人としての彼は古い倫理的な生き方を守ろうとしていた。従つて、杜子春は仙人にはなれず、「人間らしい正直な」生き方することになつたのだが、作者は、最後に鉄冠子から泰山南麓の桃の花咲く家を杜子春にプレゼントさせて、無

意識の内にも何やら「仙人らしい正直な暮し」をしようという脱世間的な生き方を許している。恐らく、杜子春は地獄で再会した献身的な母親の於母影だけを抱いて旅立つのであり、其処には、芥川自身の死別した生母に対する渴仰が反映されているようである。

論者は、又、如上の「杜子春」觀を基として、「蜘蛛の糸」(大正七年七月、『赤い鳥』)から「魔術」(大正九年一月、『赤い鳥』)、そして此の「杜子春」を経て「白」(大正一二年八月、『女性改造』)に到る芥川童話の展開を、單なるエゴイズム克服の發展的展開とは見ず、その背後で陰翳を加える作者の人間の悲哀の深化過程として捕えようとした。即ち、「蜘蛛の糸」にあつては人間のエゴイズムに対する決然とした否定が認められるのに(従つて、其処からは人間が如何に生きるべきか明確に指示されているのに)、次作「魔術」においてはエゴイズム克服の可能性について不安な翳りを見せ、「杜子春」に到つては無意識の裡にも「世間の人たち」のエゴイズムからの逃避を主人公に許し、最後の「白」においては白の自殺願望を通して、エゴイズムの克服が死を前提としなければ不可能であるという悲しい認識に到達したのではないかと考え

たのである。<sup>註。</sup>

論者の考え方は、基本的には今も変りないのだが、そうした考察の中で論理の進行上種々の問題を見切り発車せざるを得なかった。例えば、それは、「杜子春」については、材源「杜子春伝」中には登場しない杜子春の母のイメージを、作者はどのようにして発想したのかという疑問である。或いは、又、「白」については、白は非道い仕打ちを受け乍ら御主人達をどうして斯くも愛慕するのかといった問題である。これ等の点について、問題は今も論者の中で明確な解決をみている訳ではないが、本稿では若干の臆断を述べてみたいと思う。本稿を「杜子春」追考と題する所以である。

## 一

芥川は、「杜子春」について河西信三宛昭和二年二月三日付書簡の中で次のように述べている。

：なほ又拙作「杜子春」は唐の小説杜子春傳の主人公を用ひをり候へども、話は2/3以上創作に有之候。なほなほ又あの中の鐵冠子と申すのは三國時代の左玆と申す仙人の道號に有之候。

此処で、芥川が「杜子春」は唐代伝奇「杜子春伝」に依拠し乍らも2/3以上創作であるとして述べているのは、これ等二つの作品を読み較べてみれば容易に首肯出来ることである。例えば、峨眉山（「杜子春伝」では雲台峰）における杜子春の仙術修業（仙葉製造の為の苦行）を見ても、芥川は、「杜子春伝」中の簡潔な叙述を視覚的、聴覚的に具体化し、多くの比喩を用いて細叙している。それから、又、杜子春の心理変化を具

に説明し、年少の読者も主人公と共に一喜一憂すべく工夫を凝らしている。こうした点については既に多くの評家によって詳細な比較検討が行われているが、今回論者が改めて注目したいのは次のような点である。即ち、「杜子春伝」においては、無言の行を課せられた杜子春が、責苦として女性に再生させられ、自ら子供を産んで母親となり、我が子の殺される場面に到って思わず声を発しているのに対し、「杜子春」においては、杜子春は、地獄で鞭打たれる父母を見かねて声を発しているという点である。従つて、又、「杜子春伝」では、問題は母親の子供に対する「慈愛」ということになり、

子春の愛心に生じ、忽ち其の約を忘れ、覺えずして聲を失して云く、  
噫、と

と記述されるのに対し、「杜子春」では、問題は子供の母親に対する「孝心」ということであり、次のように描かれることになる。

：杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといへばそれは二匹とも、形は見すばらしい瘦せ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

鬼どもは一齊に「はつ」と答へながら、鐵の鞭をとつて立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練未釋なく打ちのめしました。鞭はりうりうと風を切つて、所嫌はず雨のやうに、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、——畜生になつた父母は、苦しうに身を悶えて、眼には血の涙を浮べた儘、見てもゐられない程嘶き立てました。

杜子春は必死になつて、鐵冠子の言葉を思ひ出しながら、緊く眼をつぶつてゐました。するとその時彼の耳には、殆どはいへない位、かすかな聲が傳はつて來ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰つても、言ひたくないことは黙つて御出で。

それは確に懐しい、母親の聲に違ひありません。杜子春は思はず、眼をあきました。さうして馬の一匹が、力なく地上に倒れた儘、悲しさうに彼の顔へ、ぢつと眼をやつてゐるのを見ました。

杜子春は老人の戒めも忘れて、轉ぶやうにその側へ走りよると、兩手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん。」と一聲を叫びました。

こうした改変は、「杜子春」が年少の読者を想定した童話である為、子供の側からも理解し易い母親への愛情に変えたのだというだけではなく、中国と日本における親子關係、延いては倫理道德の在り方に迄発展する比較文化的命題を含んでゐるようである。だが、それは扱っておき、問題を芥川に即して考へるならば、この母を呼ぶ杜子春の聲は作者自身の深部に發した切実なものであることが明らかになつてくるであらう。

論者が特に注目するのは、杜子春が単に鬼共に苦しめられる父母を見て聲を發してゐるのではなく、その後彼の心に響いてきた母親の声を聞いた時初めて「お母さん」という一声を發してゐることである。此処では、子供の側からの「孝心」の問題を超えて、母親の方からも愛の手を差し伸べ、子供の方も其れに応えるという問題になつてゐるのである。あの母親の言葉は、「大金持になれば御世辭を言ひ、貧乏人になれば口

も利かない世間の人たち」の其れとは違つた無償の愛に裏付けられたものであり、それ故に杜子春の内部に眠つていた人間信頼を覚醒させるものであつた。そして、芥川は、この一言の前に瞬時の沈黙を置き、それを一層効果あるものとしてゐる。即ち、此処で閻魔大王の大声は森羅殿を震わせ、鬼共の鞭はリュウリュウと鳴るが、次第に静まつてゆき、やがて静寂の内に母親の聲は微かに響くのである。そして、瞬時の沈黙の後に杜子春の聲は大きく訝すという展開である。そして母親からの愛も又、子供の側からの愛も同時に浮かび上つてくるのである。

斯様に此の母子の一体感は極めて印象的なのであるが、論者は、曾て幼少の頃に、このように我が子の幸福だけを願う献身的な母親が何故に地獄の畜生道等に墮ちていなければならぬのかという不審を抱いたことがある。詰り、この母親は本物ではなく、杜子春を誑かそうとする魔性共の狡猾な良ではないかという疑問を抱きつつ讀んでいたということである。そして讀了後、この母親が本物であつたことを確認して改めて思ひ到つたのは、結局、この慈母は怠惰で浪費家である杜子春のような敗児を育てたという罪によつて地獄に墮ちてゐるのであるという幼稚な合理化であつた。そして、杜子春の改心と共に父母も救われたであらうと想像して無理に安心した記憶もある。だが、こうした疑問は論者の心底に微かに保持された儘であつたが、そうした意味合いから、此処で注目したいのは谷崎潤一郎の「ハツサン・カンの妖術」(大正六年一月、『中央公論』)という作品の存在である。何故なら、其処にも子供の悪徳故に成仏出来ぬ母親の姿が描かれてゐるからである。この谷崎作品は、「杜子春」に先行する芥川童話「魔術」の素材となつた小説であり、芥川は、「ハツサン・カンの妖術」の作中人物マテイラム・ミスラや大森のミスラ邸に点る石油ランプや紅茶等々を借用して、「魔術」一篇を創作してゐる。そして、論者が興味深く思つたのは、その終末部分である。

其処では、主人公である「予」（タニザキ）は、ミスラの操る妖術によつて幻想世界に引き込まれ、須彌山に到つて死別した筈の母親に再会する。次にそれを引用する。

母は一羽の美しい鳩となつて、その島の空を舞つて居た。さうして、たま／＼通りか、つた予の肩の上に翼を休めて、不思議にも人語を囁りながら、予に忠告を與へるのであつた。「わたしはお前のやうな悪徳の子を生んだ為めに、その罰を受けて、未だに佛に成れないのです。私を憐れだと思つたら、どうぞ此れから心を入れかへて、正しい人間になつておくれ。お前が善人になりさへすれば、私は直ぐにも天に昇れます。」——かう云つて啼く鳩の聲は、今年の五月まで此の世に生きて居た、我が母の聲そつくりであつた。

「お母さん、私はきつと、あなたを佛にしてあげます。」  
予は斯く答へて、彼女の柔かい胸の毛を頬に擦り寄せたきり、いつ迄も其處を動かうとしなかつた。

これは、梵語 Kalavinka に由来し極楽に住むという人頭鳥身の妙音鳥迦陵頻伽にも似た美しいイメージであるが、論者は、更に次のような点に注目するのである。即ち、両作品では、森羅殿と須彌山と状況は異なり、瘦せ馬と鳩という相違はあるが、共に母親は人語を發する鳥獸として登場し、我が子に語りかけているのである。そして、又、母を思う子の思ひは同質のものである。

だが、此処で注目したいのは、母親の語りかける言葉の内容である。即ち、谷崎にあつては、母親は我が身の幸福（成仏）を願ひ、それを可能ならしめる我が子の改心を直接的に訴えるのに対し、芥川にあつては、母親は我が身の幸福（責苦から逃れること）を願はず、只管我が子の幸福

のみを願つてゐることである。勿論、谷崎の描く母親にも我が子の幸福（良心的改心）を願ひ気持は含まれていようが、芥川の描く母親の方がより以上に犠牲的な無償性が強調されているのである。

作中人物と作者の混同は厳に慎まなければならぬが、「幼少時代」や「異端者の悲しみ」等に描かれた谷崎と生母関との関係は極めて濃密なものであり、時に反撥したり批判し合つたりし乍らも、強い肉親愛に結び付けられたものである。後に谷崎が、「痴人の愛」や「春琴抄」に描かれるサロメ型女性から、「少将滋幹の母」や「夢の浮橋」に象徴されるマリヤ型女性へと嗜好を移し、一連の母恋ひ物を完成させることはよく知られた事実である。又、クラフトエビング等の精神分析学者が説く処を信ずれば、谷崎の追い求めたマゾヒズムも、母性との合一を願う近親相姦的欲求に対する自己処罰として要請されたものであり、谷崎の母親との精神的密着はそれ程に強固なものであつたと考えられる。要するに、谷崎にとつて、母親は身近にある具体的存在であり、母親も、又、何の遠慮もなく我が身の幸福を得る為に子供に要求を突きつけ、我が子も其れに応えるといった親密な関係であつたと思われる。

一方、芥川にとつて、生母ふくとの関係は如何なるものであつたか。ふくは、芥川の生後間もなく発狂し、彼の少年時代まで生き続けるが、遂に親子らしい交流のなかつたことは、これ又よく知られた事実である。杜子春の母親が畜生道に墮ちているのも、或いは狐憑きと呼ばれ、狂人であつたふくの状況が（無意識の裡にも）反映されたものかも知れない。それは扱ておき、「杜子春」において、我が子の幸福だけを願う母親の無償の愛は、特に其の呼びかけは、現実の芥川にとつては遂に味うことの出来ない夢の如きものであり、彼が限らない憧憬を持つて希求すべきものであつたに違いない。さればこそ芥川の描く母親像は一層純化され、献身的なものとして結晶されたのであろう。

芥川は、後年の作品「點鬼簿」（大正一五年一〇月、「改造」）の中で、生母ふくについて次のように回想している

僕の母は狂人だつた。

かう云ふ僕は僕の母に全然面倒を見て貰つたことはない。何でも一度僕の養母とわざわざ二階へ挨拶に行つたら、いきなり頭を長煙管で打たれたことを覚えてゐる。しかし大體僕の母は如何にももの靜かな狂人だつた。僕や僕の姉などに畫を描いてくれと迫られると、四つ折の半紙に畫を描いてくれる。（中略）唯それ等の畫中の人物はいづれも狐の顔をしてゐた。

僕の母の死んだのは僕の十一の秋である。（中略）その死の前後の記憶だけは割り合にはつきりと残つてゐる。

僕の母は三日目の晩に殆ど苦しまずに死んで行つた。死ぬ前には正氣に返つたと見え、僕等の顔を眺めてはとめ度なしにぼろぼろ涙を落した。が、やはりふだんのやうに何とも口は利かなかつた。

此処で、死の直前には正氣に返り涙を流したという母親の姿は、或いは事實ではなく、そうあることを願つた芥川の誤解であるのかも知れない。それは定かではないが、この涙を流す母親の姿は、「杜子春」のクライマックス場面で矢張り涙を流して杜子春に呼びかける母親の姿を連想させずにはおかないものである。先の「母に全然面倒を見て貰つたことはない」とか「が、やはりふだんのやうに何とも口は利かなかつた」といつた言葉を裏返してみれば、芥川の願望が奈辺にあつたかを透視出来るようである。そうして芥川は、「杜子春」という虚構の中で、詰りは精

神的眞実の世界で「お母さん」という切なる一声を發し、一体感を実現し得たのであろう。

こうして杜子春は、母親の無償の愛故に鉄冠子の教導する「人間らしい、正直な暮し」に向かおうとするが、唯、彼はストリートに洛陽の「世間」に回帰するのではなく、鉄冠子の与えた泰山南麓の桃の花咲く家へと旅立つてゆく。こうした杜子春の後姿には、単に「人間らしい、正直な暮し」をしようとする人の暗れ暗れしさばかりではなく、死後の世界で再会した母親の於母影だけを抱いて「仙人らしい、正直な暮し」をしようとする人の孤独も漂つてゐるようである。恐らく、杜子春は、今後母親の愛故に目覚めた人間性を成長させ、「世間の人たち」とも和解して人生を肯定的に生きようとするであろうが、何かを断念したような一抹の哀愁を払拭することは出来ない。それは、作者芥川が「杜子春」という作品において夢想していたのが、矢張り、亡き母への希求であつたことの自らなる反映でもあろう。

此処でやや協道に外れるが、父親についても一言しておきたい。と言うのも、論者は、曾て幼少の頃、「杜子春」のクライマックス場面で父親は何故沈黙しているのであらうかという愚問を抱いたことがあるからである。父親は母親と共に森羅殿の前に引き据えられ同様に鞭打たれて苦しむのであるが、杜子春に語りかけるのは独り母親のみである。母親の言葉中に「私たち」とあるのを見れば、恐らく父親は母親と同様の思ひであつたと想像され、それ故に省筆されたと思われるが、芥川にとつて、彼の二十八歳迄存命していた実父新原敏三は余りに現実的な存在であり、作品中に希求すべきものではなかつたのであろう。「點鬼簿」中に描かれた敏三の姿は、心ならずも長男龍之介を妻の実家芥川家の養子にしてしまい、後に何とか呼び戻そうとする愛情ある父親であるが、芥川の方では、生母に対する時よりやや冷淡なようである。そして、この

実父と精神的合一が成立するのは、矢張り、死別した生母（敏三には前妻）のことを語り合う場面だけである。

僕が病院へ歸つて來ると、僕の父は僕を待ち兼ねてゐた。のみならず二枚折の屏風の外に悉く余人を引き下らせ、僕の手を握つたり撫でたりしながら、僕の知らない昔のことを、——僕の母と結婚した當時のことを話し出した。それは僕の母と二人で筆笥を買ひに出かけたとか、鮎をとつて食つたとか云ふ、瑣末な話に過ぎなかつた。しかし僕はその話のうちいつか眶が熱くなつてゐた。僕の父も肉の落ちた頬にやはり涙を流してゐた。

僕の父はその次の朝に余り苦しまずに死んで行つた。

父親は、矢張り、母親の傍にあつて初めて追慕されるものらしい。

それから、又、「杜子春」の中には、謂わば、父親の役割を担うものとして既に鉄冠子の存在がある。この道德的深慮を持つて人間の生き方を教える教育者鉄冠子の姿は、正に父性的愛の意味を象徴したものであり、又、母性的な愛情とは別の次元で子供を慈しむ愛情を暗示するものである。〔因みに芥川は、この「杜子春」執筆の時点で既に長男比呂志の父親として生きる自覚を持ち始めていた〕。鉄冠子は、杜子春と別れる前に「急に厳な顔」をして「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ」と明かす。この言葉は、一面で、杜子春に無言の行を約束させ乍ら、彼が約束を守り通した時には、死の刑罰を与えようという不条理な残酷さを持つもののようにも思われるが、又、一面では、縦え鉄冠子との約束を破つても（それは、仙人になりたいたいという多分に利己的な欲求に発するものであるから）、人間の生き方を取つた杜子春の撰択を是認し、支持し、今後の彼の生き方

を力付ける為の念押しのようにも考えられる。いずれにしても杜子春の人間性開眼の中核をなす母親との一体感を強調する為には、父親の一言はもう不要なのであり、鉄冠子の存在が、それを補つて余りあるようである。

## 二

以上のように、論者は、「杜子春」の中から芥川の母なるものへの希求を抽出したが、この問題は、最後の童話「白」にも微妙な影を投げ掛けていようである。問題は、既に「杜子春」に尽きるようにも思われるが、「白」に関する若干の臆断を追加しておきたい。勿論、「白」には母親は登場しない。が、白にとつて育ての親とも言うべき御主人達坊っちゃんとお嬢さん）が登場する。以下、この両者の関係を吟味したいのである。

例えば、白は、犬殺しの罌を逃れて一目散に御主人達の処へ逃げ帰る。そして、自分の体験した恐怖を訴えるのだが、既に友達達の黒を見殺しにした報いで外形を黒犬に変えられていた白は狂犬と見做され、坊っちゃんのパットに打たれる。そして、この白の愛慕が無残に拒否される場面は、パットと長煙管の違いはあつても、何程か先に引いた「點鬼簿」中の母子対面の場面を連想させる。

何でも一度僕の養母とわざわざ二階へ挨拶に行つたら、いきなり頭を長煙管で打たれたことを覚えてゐる。

元々白と御主人達との関係は、犬は人間の言語を解するのに、人間は犬の其れを解さないという一方通行的なものであつたが、これは、或る意

味で「杜子春」の親子関係とは微妙な捻れを感じさせるものである。即ち、「杜子春」にあつては、読者が視点を重ねるべき主人公杜子春は人間であり、その愛慕の対象である母親が動物であつた。一方、「白」にあつては、主人公白は動物であり、御主人達は人間である。勿論、最終的には、「杜子春」にあつても、人間である杜子春が動物である母親の慈愛に応えるように、「白」にあつても、人間である御主人達は動物である白の愛慕に応えることになるのだが、唯、白の思いは、曾て彼が黒犬であつたが故に味つた悲しみを含めて、御主人達に完全に理解されることはない。そうした意味合いにおいては、白の愛慕は矢張り拒否された儘だとも言えるので、後述するように、こうした無理解を超えて両者を合一させようと願う思いの強引さが、却つて芥川自身の生母への願望を反映したものではないかと想像させるのである。

一先ず元へ還つて言えば、白は、この後宿無し犬となつて放浪し、新聞各紙に報道されるような大活躍を重ねて義犬としての名を高める。これは、誠に勇ましくも悲しい大活躍であつて、やや牽強付会気味に強弁すれば、それは、生母ふくの下を離れて成長した芥川が、大阪毎日をはじめとする新聞雑誌に小説を発表し、文学者としての名声を高めた事実に対応する。そして、作品末尾において心身共に疲れ果てた白が、あのバットに打たれたことも忘れて、否、バットに打ち殺されることさえ覚悟して、再び御主人達の処へ帰つてくることになる。こうした白の育ての親とも言うべき御主人達に対する多少片務的な愛慕には、或る意味で律義過ぎる養子であつた芥川の養父母への孝心が反映されているようにも思われるが、その切ない迄の内実は、そうした倫理道德次元のものでなく、真情に根差したものである。既に自殺の決意さえ秘めた白にとつて、帰る処は此の御主人達の処しか無かつた訳で、彼の窮極の幸福は此の一点にかかつている。縦え如何なる拒否に会おうとも。

それだけに白が翌朝白い外形を回復してお嬢さんの腕に抱かれるというハッピー・エンディングは感動的であるが、論者は、曾て幼少の頃、この夜明けの場面そのものが死にゆく白の夢想する幻想風景ではないかと思つたことがある。詰り、白の御主人達に対する愛慕は遂に報いられることなく、彼の殉情を憐れんだ「お月様」が死にゆく彼に幸福の幻影を与えたものと受容したのである。そうした錯覚の上に更に想像を逞しうすれば、既に自殺の決意を秘めた白が回帰すべき処が御主人達の下であつたように、心身の衰弱を来し、有島武郎の自殺に衝撃を受け、娑婆苦に疲れた芥川が最終的に回帰すべき処は死する生母ふくの下ではなかつたかと思われる。あの俗世間に絶望した杜子春が無限の愛を籠めて注がれた母親の眼差しの中に真の幸福を感じたように、又、白が其の愛慕を理解されずとも米粒程の白さに彼を映し出すお嬢さんの瞳の中に至福を感じ得たように、芥川も、又、現世では叶うことのない生母ふくの涙の中に至福を夢想していたのではなからうか。「白」の後、もう、童話を書くことのなかつた芥川にとつて、「白」の最終場面は、矢張り、一つの極点であつたと思われる。

以上、論者は、「杜子春」における母の問題を追尋し乍ら裏小路に踏み迷つて「白」を深追ひし過ぎたようである。だが、合計八篇に上る芥川童話の内涙と共に終るのは此の二作であり、何程か微妙な類似があるように思われる。芥川童話については、特に其の結末部分に着目し、「蜘蛛の糸」から「魔術」へ、そして「杜子春」から「白」へという道筋を、主人公達のエゴイズム克服の発展的展開と見る見方等もある。だが、それぞれに異なる主人公達の状況を視野に入れ、特に彼等を試し導く超越者的存在にも留意するならば、それは、必ずしも単線的な発展とだけ見ることは出来ないようである。又、これ等個別的な四作品の読後感は、

逆に後作に到る程哀切さを加えるようにも思われる。抑々これ等の作品は年少の読者を想定した童話であるから、エゴイズム克服といった大人の倫理的視点からのみ眺められるべきものではないであろう。年少の読者には、或いは、生死に関わる我執を描いた「蜘蛛の糸」と、金銭的欲望をめぐる「魔術」と、母への愛情によつて利己心を反省する「杜子春」と、友達への裏切りを克服する「白」とは、それぞれに人間のエゴイズムを扱つてはいても、全く別個の作品と映るかも知れない。又、子供自身の興味から言えば、生死より金銭、それよりも親子、更には友達といった風に、素材的には後作の方がより親しみ易い話柄であるかも知れない。とすれば「白」が最も親しみ易い作品のようにも考えられるが、唯何といつても白は人間ではなく犬であるから其の点を多少割引くとして作者の意図が最も理解し易いのは「杜子春」ではないかとも考えられる（或る意味で立派過ぎる白が人間ではなく犬であるのは、芥川の人間に対する絶望を反映したのかも知れない）。いずれにせよ芥川童話はそれぞれに魅力ある空想性と倫理性を備えた作品であり、それ等を系統的にだけ把握したり、価値付けたりすることは、必ずしも有意義ではないであろう。最後に、論者は、「杜子春」の涙に、最も芥川の素顔らしきものを実感するのただけ言っておきたい。

註1、拙稿「『杜子春』の陰翳」（『愛媛国文研究』第29号、昭和54年12月）参照。

註2、拙稿「芥川童話の展開をめぐって」（『愛媛国文と教育』第21号、平成元年12月）。

（平成三年四月二十五日受理）